

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点

学校種間の接続・一貫性を追求した実践事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

新潟県柏崎市

○学校名

柏崎市立荒浜小学校

○学校のURL

<http://kedu.kenet.ed.jp/arahama/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】3・6学年各1学級、1・2・4・5学年各2学級
【特別支援学級】2学級 【合計】12学級

○児童生徒数

【全校児童数】281人（平成25年11月1日現在）
（内訳：1年生57人、2年生45人、3年生30人、4年生50人、
5年生57人、6年生42人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育】

学ぶ子 高まる子 きたえる子

【人権教育に関する目標】

確かな人権感覚を培い、自他の人権を尊重する子供の育成

○人権教育にかかる取組の全体概要

研究の4本柱



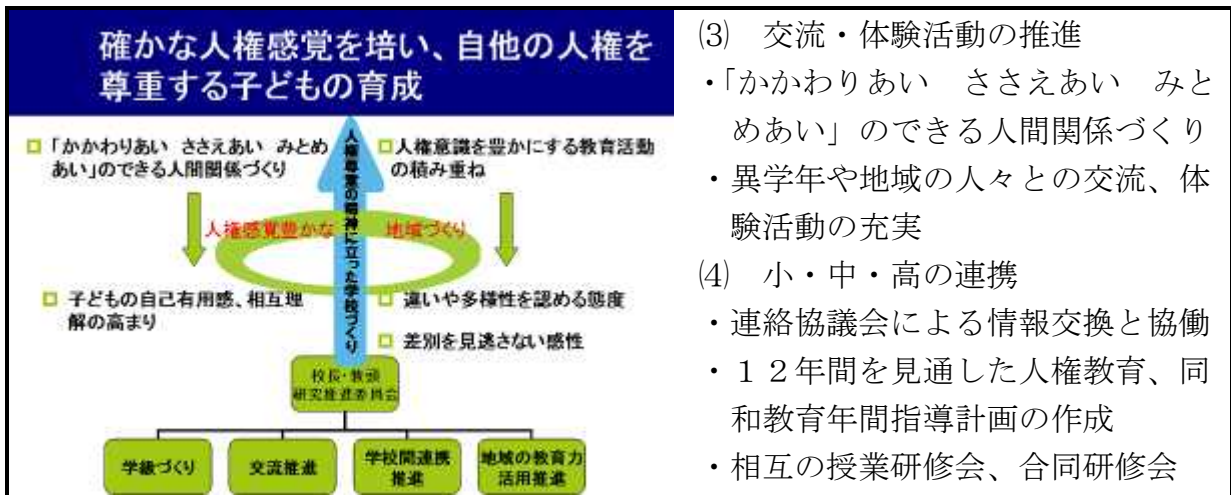
人間関係づくり(生徒指導)

(1) 学級経営の充実

- ・学習に集中できる環境づくり
- ・いじめ防止学習プログラム等の取組による「子供の居場所づくり」

(2) 人権教育、同和教育の授業の充実

- ・憤りを行動力に高める授業づくり
- ・プラスイメージで学ぶ同和问题学習



- (3) 交流・体験活動の推進
- ・「かかわりあい ささえあい みとめあい」のできる人間関係づくり
 - ・異学年や地域の人々との交流、体験活動の充実
- (4) 小・中・高の連携
- ・連絡協議会による情報交換と協働
 - ・12年間を見通した人権教育、同和教育年間指導計画の作成
 - ・相互の授業研修会、合同研修会

3. 特色ある実践事例の内容

(1) 学級経営の充実

「一人一人に寄り添った学級経営を実現」するために、子どもの居場所づくり、支え合う集団づくりに主眼を置いた。全ての子供が学習に集中できるようにするため、聞く姿勢、発表の仕方、学習用具の使い方などの学習規律の確立や学習環境の整備に取り組んだ。

また、「いじめ防止学習プログラム」の取組では、「運動会」「学習発表会」「六送会」など大きな行事の前後に行う児童アンケートをもとに、全職員で共通目標を理解し、困り感の強い子供が落ち着ける居場所をつくり、自己有用感を高めるための手立てを講じた。

(2) 人権教育、同和教育の授業の充実

「差別に憤り、課題の解消へ行動できる子どもの育成」を目指す同和教育の視点として以下の2点を全教職員で共通理解した。

ア 「差別は、差別する側の問題、差別する心の弱さの問題」であること

イ 「同和问题との出会いはプラスイメージで向き合う」こと



6年生の同和问题学習では、差別されてきた人々が、日本の文化の担い手として大切な役割を果たしてきたことを知り、差別に立ち向かい、人権を獲得してきた道筋を丁寧に学んだ。

また、子供自身が差別に憤り、そのエネルギーを行動化へつなげるために、以下の取組を推進した。

①学習過程の基本形を「事実を正しく知る」→「当事者意識をもって、差別に憤る」→「問題解決のために何ができるか考え、話し合う」とする。

②行動化へのエネルギーを高めるために、現地見学や交流・体験活動と結び付けた内容を重視し、それらを年間指導計画に位置付けた。

(3) 交流・体験活動の充実

「かかわりあい ささえあい みとめあい」のできる人間関係づくりに取り組む中で、子供の発案により、みんなの絆を見守るキャラクターとして

「荒小絆マン」が考え出された。レッドはクラスの絆、イエローは縦割り班の絆、グリーンは地域との絆のシンボルになった。更に「荒小9か条」を子供たちの手で作成し、児童主体の行事や活動の行動指針としていった。

また、地域との交流の核として、地域のプロ水球チームとの交流を通して、世界レベルの選手から、困難に負けない心の強さ、人に対する優しさなどを学ぶことができた。

荒小 9か条

〈かかわりあい〉

- 1条 だれにでも目を見てあいさつをします。
- 2条 問題があったらみんなで話し合います。
- 3条 だれとでもグループを作ります。

〈ささえあい〉

- 4条 あたたかい言葉をかけ合います
- 5条 困っている人をフォローします。
- 6条 教え合えるふんいきを作ります。

〈みとめあい〉

- 7条 進んでよさを見つけ合います。
- 8条 友だちが発表したらみとめ合います。
- 9条 返事と聞く姿勢をよくします。



荒小絆マン

(4) 小・中・高の連携の取組

①小・中・高連絡協議会

柏崎市教育委員会の指導の下、当校、柏崎市立松浜中学校（研究協力校）と県立柏崎総合高等学校（新潟県教育委員会人権教育、同和教育研究指定校）の4者で連絡協議会を立ち上げ、人権教育、同和教育に係る情報交換、課題の共有を図った。各校の実態を踏まえると、「学校間による学びにばらつきがある」、「誤った認識で入学してくる生徒がいる」等の課題が出された。

協議を重ね、①小学校、中学校、高等学校での学びを共通理解するための合同研修会や相互の授業研究、②指導時数や発達段階を踏まえた12年間のカリキュラム表の作成について、その必要性を確認した。

そこで、「小学校で出会う同和問題はプラスイメージを大切にする」「中学校で同和問題の正しい認識を培う」「今後出会うであろう差別問題に正しく行動できるようにして高等学校を卒業する」というアウトラインを描き、学び残しはないか、重複して学ぶ必要がある教材は何か、等について指導内容の精査を行った。また、研究発表会の内容についても検討し、相互にアドバイスし合うことができた。



②合同研修会、授業研究会

3校を各会場として、合同研修会、講演会、授業研究会を行い、校種間の隔たりを超えた研修を積み重ねた。それぞれの立場から活発に意見を交流し合うことで、新たな発見や課題が生まれ、職員や児童



- ・生徒の人権感覚を確かめながら授業の質を高めていくことができた。

③12年間を見通した年間指導計画の作成

(別紙参照)

情報交換をする中で、「発達段階や系統性を踏まえた指導計画」「学び直しの大切さ」を再確認し、12年間の人権教育、同和教育年間指導計画の作成に着手した。



「差別と向き合い、正しく行動できる子供」の育成に向けて、児童・生徒の生活経験や発達の観点から小・中・高の12年間で5つの成長期に分け、各段階で「育てたい児童・生徒像」「取り上げる差別問題」を精査していった。

期	学年	育てたい児童生徒像	取り上げる差別問題
I 期	小学1・2年生	差別を見逃さず、差別に憤り、他人を思いやる児童の育成	身近ないじめ、差別問題が中心
II 期	小学3～5年生	差別を見逃さず、差別に憤り、問題を自分のこととして考え、問題の解消に向けて行動しようとする児童の育成	身の回りや社会にある差別問題が中心
III 期	小学6年生、中学1年生	文化の担い手、人権獲得の先駆者としての差別された人々から同和問題を学ぶ児童生徒の育成	プラスイメージで学ぶ同和問題が中心
IV 期	中学2・3年生	人権問題、同和問題を正しく理解し、差別に対して正しく行動できる生徒の育成	人権問題、同和問題の正しい理解が中心
V 期	高校1～3年生	差別問題と向き合い、差別を許さず、差別事象に対して正しく行動できる生徒の育成	就職差別や結婚差別等、これから出会うであろう差別問題が中心

小学校低学年では、「生きる」シリーズ（新潟県同和教育研究協議会作成の副読本）を中心として、身近ないじめや仲間外し等を中心に扱う。いじめや差別事象に触れ、差別を見抜き、その不当性に憤り、相手を思いやる心を耕していく。

小学校3年生からは、いじめや障害者差別、高齢者への差別等、具体的な差別事象を扱っていく。「生きる」シリーズを中心に、他府県の指導資料で補いながら、差別を見逃さず、差別に憤り、問題を自分のこととして考え、問題の解消に向けて行動しようとする児童の育成を図る。



同和問題と出会う6年生では、「人権の歴史」「汚染一揆」「水平社宣言」等の学

習を通して、差別されてきた人々は、文化の担い手であり人権獲得の先駆者だったことや、その努力の過程や協力して願いを実現しようとしてきた道筋に学ぶ。

その学びを受けて、中学校1年生では、歴史的分野の授業と関連付けながら、同和問題の「学び直し」を行い、「差別に立ち向かい、たくましく生きてきた人々の生き方」に共感しながら深く学んでいく。

中学校2年生・3年生では、人権問題、同和問題の正しい理解を通して、今なお残る差別事象についての学びを新たにする。

さらに、高等学校では、就職差別や結婚差別について具体的に学び、将来、差別問題に出会ったときに、正しい行動ができる人間性の育成を目指す。

小・中・高の12年間で、差別を見逃さず、正しく行動できる人格が形成されるよう、身近ないじめや差別問題から順次、視野を広げ、系統性と学び直しを大切にして、確かな学びを培うための指導計画を作成した。そして、それを柏崎市のスタンダードモデルとして提案した。

4. 実践事例の実績、実施による効果

- 授業研究の積み重ねにより、現地学習や体験活動が差別への憤りや問題意識を高めることが明らかになってきた。体験活動や共通体験を取り入れることは、知的理解から行動化への大きなエネルギーになることが以下の児童の文章にも表れている。

<学習を振り返っての児童の感想>

「失われた人権」（北朝鮮による拉致問題）の授業実践から
拉致被害者の方の話を聞いての感想文（テーマ「失われた自由」）

私は今日の話聞いて感じたことは、自分の権利や自由がなくなることは、家族や友達に会えなくなり、さみしくて怖いことだと思いました。拉致された方でまだ戻ってこない方もいるので、一刻も早く日本に戻ってあげたいと思いました。北朝鮮の方をうらまないように気を付けたいです。

拉致被害者の方は、北朝鮮で大変な思いをされてきたことがよく分かりました。何もしていないのに、自分の好きなことができなくなって自由がなくなったことは、おかしいと思いました。私は、自由のない暮らしをしていたら悲しくなってしまうように思います。まだ北朝鮮にいる人に戻ってきてほしいと思いました。

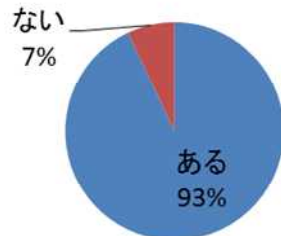
- 授業や交流活動を通して、自分に自信をもち、やりがいを感じて活動に臨む子供が増えた。
- 絆の大切さを意識し、相手を大切にし、感謝の気持ちをもって、かかわり合っていく雰囲気醸成されてきている。
- 校種の異なる教職員の意見交流により、多様な視点から授業研究をはじめとする研修会を行うことができた。
- 12年間を見通した人権教育、同和教育年間指導計画に基づき、長期的な視点に立って指導を展開するようになった。

5. 実践事例についての評価

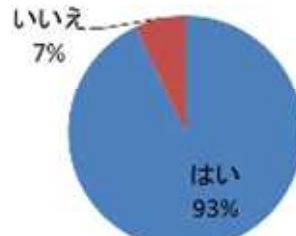
(1) 取組の成果

児童アンケートから

いじめをなくすために心がけていることがある



進んで友達の喜ぶことをしている

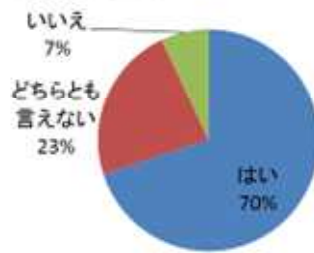


保護者アンケートから

「かかわりあい さえあい みとめあい」など生徒指導の基盤が確実なものになってきている



思いやりの心を育てるための教育がなされている



①当校の児童や保護者の変容から

- 児童アンケートで、「いじめをなくすために心がけていることがある」「進んで友達の喜ぶことをしている」児童が90%以上で推移し、80%以上の子供が「荒小9カ条」を意識して学校生活を送っている等、「いじめや差別を生まないための子供の意識」の確かな高まりが見られた。
- 機会あるたびに、荒浜小学校の「絆プロジェクト」を保護者や地域の皆様に発信してきた。運動会・学習発表会に度々登場する「荒小絆マン」や地域のプロ水球チームとの交流の場面は、大勢の人にも知っていただき、温かい声援を頂いている。

②保護者の声から

- 1年毎に「かかわりあい ささえあい みとめあい」が広がっていくのを感じます。親も子供に負けず、保護者の間でも広がり大きなものにしていけるといいです。

○ 学校に授業参観や、その他で行っても、とても良い雰囲気だと感じます。地域でのあいさつは、このご時世、不審者の対応等もあるので「進んで」には抵抗がありますが、顔見知りの方には進んであいさつしています。近所の中学生の男の子は自分から笑顔であいさつしてくれます。小学校からの取組がきている証ですね。

○ 「絆アップ集会」など子供たちが工夫しながら一生懸命取り組んでいる姿はすばらしいと思います。一人一人が自分に自信をもっていけるように、家庭でも見守りたいと思います。

○ 義務教育の期間は学力の習得と同時に人格の形成が大切だと思っています。荒小の指導基盤はとても内面を重視したことを行っている所以素晴らしいと思います。

(2) 小・中・高の連携の取組による効果

- 異校種の授業、子供の実態を知ること自体、大変新鮮であった。それぞれの立場から、人権課題のとらえ、憤りの高まり方、子供同士の話合い、教師と子供のやりとりなどについて、長期的な視点から意見交換することができた。
- 県立柏崎総合高校では、小学校、中学校の授業からヒントを得て、講義型でなく生徒同士の話合いをメインにした参加型授業を実践した。
- 小学校、中学校は、高等学校の実態を念頭に、部落の歴史の内容を見直し、現在まで続く差別事象について、先の段階まで見通して指導案を立てた。

(3) 今後の課題

- ①当事者意識を高め、いじめや差別問題を自分の問題として考えること
問題の解消に向けて行動化を図ろうとする態度を育むためには、差別問題等を自分の身近にあると考え、当事者意識を高めていく必要がある。更に授業改善や体験活動の一層の充実に努めていく。
- ②場や相手に応じた言動や場面に応じたかかわりあいができるようにすること
「かかわりあい ささえあい みとめあい」を大切にしていこうとする機運は高まってきたが、場に応じたかかわりができない子供も見られる。個別の機会を逃さず指導を積み重ねていく。
- ③小・中・高の連携を一層深めていくこと
授業参観や研修会を継続し、子供の姿から各校種での授業の在り方、職員の人権感覚の一層の向上に努め、12年間を見通した年間指導計画をよりよいものに改善していく。
- ④保護者や地域の方とともに人権教育を充実させていくこと
子供の人権感覚を高めるには、家庭や地域の人権意識を高めていくことが欠かせない。保護者や地域に向けた啓発活動や共に取り組む活動を更に充実させていく。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

柏崎市立荒浜小学校

子供の居場所づくりと同和問題学習の充実を軸に、小・中・高を接続し、一貫性のある人権教育を推進しようとしている点に特色がある。特に、「困り感の強い子供」に寄り添いながら、自己有用感を高める具体的な手立てを取っていることや、差別への憤りを問題解決の行動に結び付けていくために体験活動を活用しているところに工夫がみられる。小・中・高が相互に新鮮な刺激と気付きを与え合いながら、12年間を見通した人権教育を協働的に実現しようとしていることは、校種間をつなぐ取り組みを発展させる上で多くの示唆を与えるものであり、また3色のキャラクター（荒小絆マン）や「荒小9か条」を児童主体の活動を促すためにうまく活用していることは、子供たちの目線を大切にした人権教育を推進する上で重要な役割を果たしている。これらの取り組みが、今後「かかわりあい、ささえあい、みとめあい」を人権教育の視点でどのように学校教育活動全体に広げていくことにつながるのか、大いに期待される。